

本番では全く言うことを聞いてくれないことなどあります。シヨールにはしかられないことを知っているのです。そんな彼らに振り回されて、トレーナーはお客さんの前でたった一人、恥をかかされることもしばしばあります。

タコの知恵比べ

この夏、私は水族館の特別展でお客さんにお見せするためにタコを調教しました。といっても、アシカのように輪投げをしたり逆立ちさせたりするのではなく、タコ自身がビンの中に入ったエサを、自分でふたを開けてとる、というシンプルなものですよ。

まずはビンのふたをゆるめに締めて、タコが触っているうちに自然とフタが開き、エサを獲得できる状態から始めます。次第にフタを深く閉めていき、「まわすとフタが開いて、中に入っているエサが食べられる」ということを覚えさせます。ここまでくれば、あとはフタをしつかり閉めても大丈夫です。吸盤と8本の足をたくみに使って、ものの数分でふたを開けるようになります。

驚いたことに、タコは10日ほどでエサ獲りを習得しました。さらには私の顔を覚え、水槽の前を通るとエサをねだるようにもなりました。



10日で覚え、数分でビンを開けることができるようになりました。

しかし、タコがかわいく思えたのは、つかの間でした。ビン開けを毎日していると、タコは水槽から外の世界に出ることを考え始めたのです。つまり脱走です。少しの間や登れそうなどころを見つけては吸盤でペタペタよじ登り、外へ出ることを目下の生きがいとし始めたのです。ビンを回収しようとして水槽のふたを開けて手を入れると、ここぞとばかりに私の腕に巻き付き、よじ登って水槽の外へ

出ようとたくらみました。タコが脱走をこころみるたびに、ふたを設置し直したり、改良したりで、そのうちにはどちらが学習しているのか、わからない状態になってしまいました。実は、タコは軟骨で包まれた脳をもっており、視力も良く、水の中の生き物としては「できるやつ」の部類に入る生き物なのです。

ほかのスタッフも別の水槽を使い、計3匹のタコにこの調教を行ったのですが、3匹の中でも、早く覚えるものや苦戦するものなど、行動や学習はまちまちでした。何度やっても開けられず、半日もピンをいじった後、最終的にふたを開けるのを放棄してしまうタコもいました。もともと、私がこのタコのことを、特にかわいいと思ったのは言うまでもありませんが。

「学問」より「楽問」

冒頭でも書きましたが、「学習」や「勉強」というと、私などは身構え、逃げ出すタイミングばかり気にしてしまいますが、生き物たちを見てみると、あながち嫌なものでもないように感じます。そして、

テレビの動物番組で必死に道具を使ってエサをとるチンパンジーを見たり、水族館で生き物たちが見せる行動に出会うと、彼らも毎日何かを学ぼうとしているんだな、頭がいいのは人間だけじゃないんだな、と思うことがあります。

少し見方を変えて、地球全体の生き物や自然界を考えてみると、いろいろな道具を駆使し、科学の力で大量に食べ物を採り、そのあげくに大量の食べ残しを出す、なんて無駄なことをやっているのは人間だけです。プランクトンの群れの中に口を開けて突っ込むだけでお腹がいっぱいになるジンベエザメのほうが、よほど効率がよく、しつかり「楽問」しているように思えてきます。

「学問」は人間の世界だけに通用するもので、いっぽう「楽問」は生き物の世界すべてで通用する共通のものなのかもしれません。もしかしたら「楽問」の分野では、まだまだ人間の偏差値はかなり低いのもかもしれませんね。

竹島水族館

学芸員 小林龍二